日本の古典文学20

文明開化

長谷川 泉





さ・え・ら書房

日本の古典文学20

文明開化

長谷川 泉



書房

著者略歴　1918年千葉県に生まれる。東京大学文学部国文学科卒業。近代文学専攻。現在学習院大学講師。近代文学研究により久松賞受賞。著書「近代名作鑑賞」「森鷗外論考」など。

日本の古典文学20

文明開化

昭和50年5月　第1刷発行
昭和60年4月　第3刷発行

著　者　長谷川泉（はせがわいずみ）
発行者　浦城光郷
印　刷　須藤印刷
製　本　協栄製本

発行所　さ・え・ら書房
東京都新宿区市谷砂土原町3丁目1
振替東京4-87244　電話03(268)4261

©1975　Izumi Hasegawa

NDC 918
ISBN4-378-01620-6

はしがき

現在はジェット機の時代であり、さらに宇宙旅行もできるような時代になりました。ヨーロッパまでは二十時間あまりでゆけます。その意味では、地球はせまくなったともいえましょう。ところで、いまから百年あまりまえまでの日本は、「鎖国」といって、世界じゅうの国ぐにとゆききをしないで、島国にとじこもった生活をしておりました。江戸時代には、鎖国によって日本だけの太平の夢をむさぼっていたのです。

しかしながら、世の中がひらけてくると、世界の国ぐにとゆききをしないで、ひとりだけ島国にとじこもっているわけにはゆかなくなりました。交通も便利になり、外国の船も日本にどんどんやってきて、取り引きをしようとせまるようになりました。あんかんと眠ったように静かにしているわけにはゆかなくなったのです。徳川幕府もいつまでも鎖国政策をとっているわけにゆかなくなり、広く世界の国ぐにに国をひらいて、取り引きをしたり、ゆききを認めなければならなくなりました。これは時代の流れにしたがうしぜんのなりゆきでした。ふるい時代が持っていたいくつかの矛盾は、新しい時代のおとずれとともに、とりのぞかれてゆきます。このようにして、徳川幕府は政治の座からしりぞき、新しい時代にこたえることのできる政府

ができて新しい政治をおこなうことになりました。明治維新は、このようにして日本の発展の基を築きました。徳川幕府の政治から、明治天皇の政治にかわり、欧米の先進国にならって、新しい国づくりが進められることになりました。

新しい国づくりにあたって、いちばん先にやらなければならないことは、まず先進国にかけ足で追いつくことでした。社会のしくみも、政治も、文化も、学問も、鎖国になれて太平の夢をむさぼっている間に、すっかりおくれをとってしまったので、まず先進国のレベルまで追いつかなければ話にならなかったわけです。なんとかして早く欧米の新しい知識をとり入れて欧米の文明におくれをとらないようにすることが日本の新時代のリーダーたちの念願でした。鎖国の時代にあっても、一部の進んだ考えを持った人たちは、蘭学（オランダの学問）などを勉強して、世界の進みゆくようすに歩調を合わせようと努力はしていました。しかし、明治維新のちは、蘭学にかわって、イギリスやフランスやドイツなどの文化が大きく浮かびあがってきました。新時代のにない手になる人たちは、そのような国ぐにに留学をして、そのすぐれた点を学び、それをいち早く日本に移そうとしました。

日本が新時代にめざめ、新しい時代に生きてゆくためには、近代文明のめぐみに浴し、近代文明をとり入れた近代国家として育ってゆかなければなりません。これは、かけ声だけではで

きないことで、かなりの苦労がいります。しかし、その苦労は楽しい苦労です。あすのひらけた国に希望が持てたからです。のびようとするもの、新しく興こるものに満ちあふれた力がこもっている時は、そういうものだと思います。

ローマは一日にしてならずということばがあるように、新しい日本の国づくり、文化づくりは、やはり一日にして完成したものではありません。ふるいものと新しいものがまざりあい、その矛盾になやんだこともありました。かけ足で追いつくのですから、時には息切れがしたこともあります。ゆっくりとおちついて歩いてゆけるならば、途中のけしきもじゅうぶんながめながらゆくことができるわけですが、そんなのんびりしたことはできません。とにかく一にもかけ足、二にもかけ足で、追いつけ、追いつけというわけです。そして、明治の日本は、外国もびっくりするほど、短い期間に、その追いつき運動をなしとげたのです。

文明開化とは、欧米の進んだ近代文明や文化に、かけ足で追いついた、この追いつき運動のことをいったものです。鎖国の期間が長かっただけに、この追いつき運動によって変わったところはすこぶる多く、日本の歴史のなかでもきわだっています。このようにして、日本はようやく近代国家のなかまになりました。

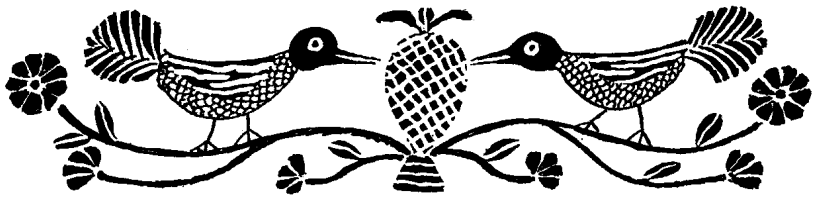
この本は、そのような歴史上の意味を持った明治の初めの文明開化のすがたを文学の面からながめてみようとして書かれたものです。いままでに体験したこともないような新しいことが、

どしどしとはいってきたのですから、とまどったり、いまから見るとこっけいなようなこともありました。しかし、これがわたしたちの住む日本の生まれかわりの姿であったのです。わたしたちのおじいさん、おばあさんたちが体験した、いつわりのない姿であったのです。

わたしは東京大学や学習院大学で、大学生に近代文学を教える体験を持っています。しかし大学生に講義するのと、みなさん方にやさしくわかりやすく話をするのとではかなり違いがあります。そこで、できるだけやさしくわかりやすくするために、みなさん方ぐらいの人たちにふだん接している先生方と討論し、その協力を得て、この本をつくりあげました。その方がたはわたしの家で開いている「西片文庫の会」という研究会に加わっている寺井敬・小坂部元秀・井上弘・鈴木晴夫・原文譲・佐藤喜久雄・前田靖雄・高橋新太郎の諸先生です。

またわたしの長男は中学生で、ほぼみなさん方と同じぐらいの年ごろです。この本の原稿はわたしの長男に読ませてみました。そして、むずかしく感じられたところは、できるだけやさしく書きなおすようにいたしました。この本は、そのようにしてできあがったものであることを、最後にしるしておきます。

著　者



もくじ

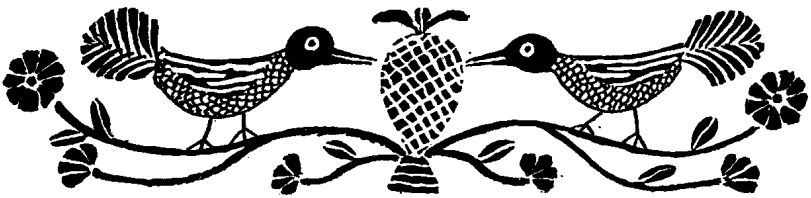
はしがき……一

学問のすゝめ（福沢諭吉）……九

一、天は人の上に人を造らず……一〇
二、みたびの海外留学……一二
三、「学問のすゝめ」の内容……一四

かたわ娘（福沢諭吉）……四七

一、「かたわ娘」の内容……四八
二、痛烈な時代諷刺……五四
三、西村雪台の「かたわむすこ」……五七
四、合理的精神……五八



安愚楽鍋（仮名垣魯文）……六一

一、混乱とかたちんばの時代……六二

二、戯作の伝統……六三

三、仮名垣魯文のおいたち……六四

四、「西洋道中膝栗毛」の滑稽……六六

五、新風俗、すきやき鍋をかこんで……六八

六、仮名垣魯文の影響……七一

七、「安愚楽鍋」の内容……七七

新体詩抄（外山・矢田部・井上）……九五

一、新しい酒は新しい革ぶくろに……九六

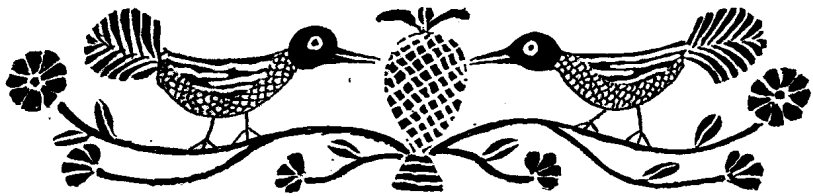
二、この本の著者三人……九九

三、「新体詩抄」の成立……一〇〇

四、「新体詩抄」の内容……一〇六

五、「新体詩抄」の波紋……一三一

もくじ



経国美談（矢野竜渓）……一三五

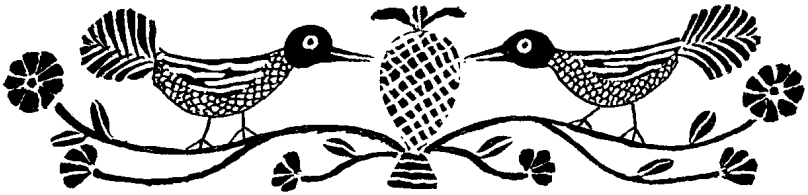
一、政治小説の流行……一三六
二、矢野竜渓の活躍……一四一
三、「経国美談」の内容……一四三

雪中梅（末広鉄腸）……一七七

一、ブームづくりをした「雪中梅」……一七八
二、末広鉄腸の生涯……一七九
三、「雪中梅」の内容……一八一

当世書生気質（坪内逍遙）……二一五

一、「小説神髄」と「小説総論」……二一六
二、坪内逍遙の生涯……二一八
三、「当世書生気質」の内容……二三一



小説神髄（坪内逍遙）……二五一
一、小説の見かたを変えさせたもの……二五二
二、外人教師につけられた悪い点の刺激……二五五
三、「小説神髄」の内容……二五六
四、「小説神髄」のはたした役割……二六一
むすび……二六四
さくいん……二七〇

そうてい　新井五郎

学問のすゝめ

福沢諭吉

一、天は人の上に人を造らず

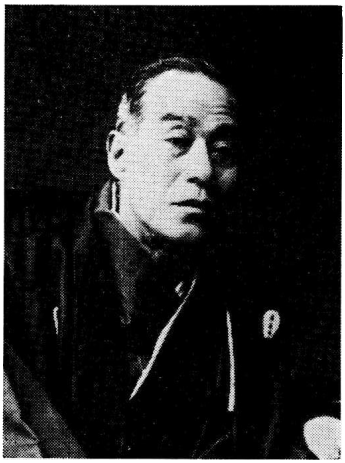
みなさんは、「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」ということばを聞いたことがあるでしょう。これは福沢諭吉の言った有名なことばです。そして、このことばは「学問のすゝめ」という書物の書きだしのことばなのです。

このことばは、福沢諭吉が何かほかの本から引用したような形式で書かれています。著者はこのことばを、ジェファソンという人の書いた「アメリカ独立宣言」のなかからとったのだといわれています。

現在、わたしたちは民主主義の社会のしくみの中で暮らしています。この民主主義の社会では、人間が生まれながらにして平等であるという考えかたは、当然のものと思えますが、著者はおよそ百年ほど前、この思想を明治五年（一八七二年）に発表したのですが、これは当時としてはたいそう進んだ考えかたであったといえます。それでは簡単に福沢諭吉の経歴をたどってみましょう。

二、みたびの海外留学

福沢諭吉は天保五年（一八三五年）十二月十二日大阪に生まれ、明治三十四年（一九〇一年）二月三日に世を去りました。年は六十八才です。



福沢諭吉

福沢家は、いまで言えばサラリーマン階級というところでしょう。身分は士族です。父はたいそう学問に熱心な人で、諭吉をお坊さんにしようと考えていたことが「福翁自伝」に書かれています。後年、封建制度は親のかたきでござるという考えを述べていますが、それほどに、その当時は身分のちがいというものがじゃまをしていたのです。福沢のことばを信じれば、中学生ぐらいになるまで勉強らしい勉強はしなかったということです。しかし、十四、五になって本気で勉強をしはじめました。左伝という漢文の本があって、当時の少年はみんなこれを読むのです。福沢は全巻を通読し、十一回も読みかえし、おもしろいところは暗記したということです。またその反面なかなか器用なたちでした。桶のたがを入れたり、下駄

を作ったり、その他いろいろなアルバイトもしました。

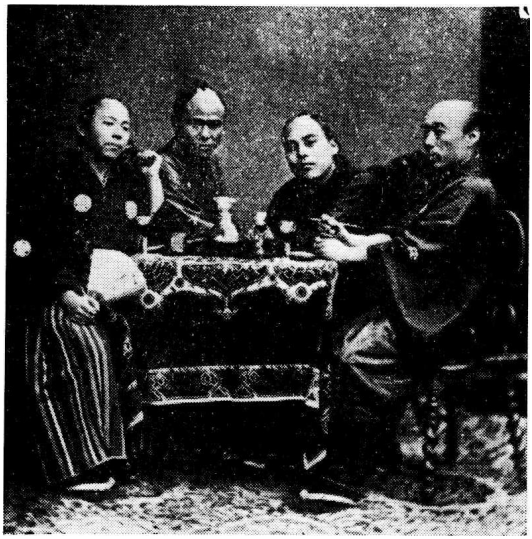
大阪では緒方洪庵の塾に入門して蘭学を学びました。安政五年（一八五八年）江戸に出て蘭学塾を開きました。その後、英語の必要を感じて独学でこれをものにしました。万延元年（一八六〇年）アメリカを訪問する使節団に加えられたのも、英語の勉強をしたことが役にたっています。



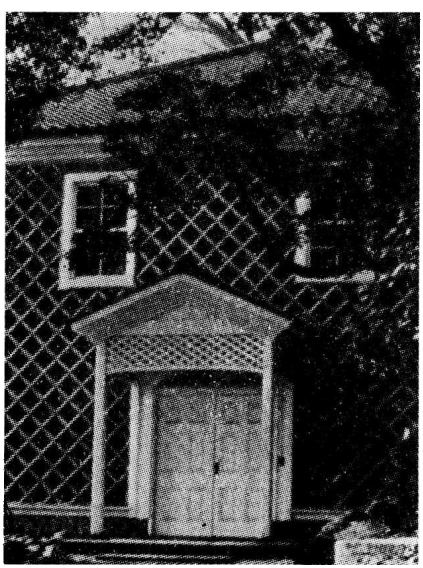
アメリカで写真館のむすめと写す

福沢は、その後も文久二年（一八六二年）、慶応三年（一八六七年）にヨーロッパを訪問しています。つごう三度外国に出かけたことになります。この体験が福沢のその後の活動にたいそう役にたちました。当時の日本は長い間の鎖国からめざめて、欧米の新しい知識を早くとり入れなければならなかったのですから、外国の事情にくわしい人はたいせつな存在でした。

福沢は慶応四年（一八六八年）に塾を芝（東京都港区）に移して名まえを慶応義塾と改めまし



1862年オランダで（右からふたりめが諭吉）

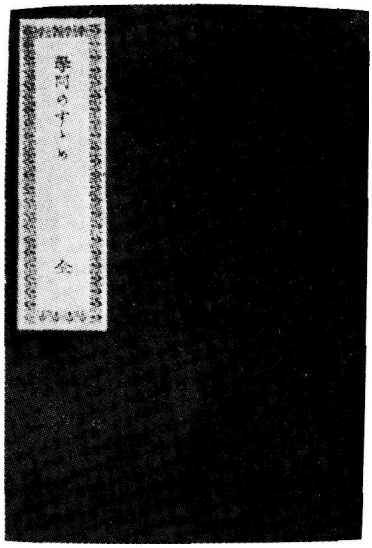


三田・慶応義塾の演説館

た。明治四年（一八七一年）にさらに三田（同じく東京都港区）に移りましたが、これが現在の慶応義塾大学の前身です。明治政府は、福沢の人物を見こんで、政府の役人になるようにと何度もすすめたのですが、福沢はとうとうことわりとおして、ひたすら民間人の啓蒙家として活動しました。その活動範囲は広く、教育者として、愛国者として、思想家として、また言論人として封建思想の打破と、国の独立と、実学（実地の役にたつ学問）の奨励とを熱心にとなえたのでした。

三、「学問のすゝめ」の内容

福沢の書いた本には「学問のすゝめ」「西洋事情」「世界国尽（くにづくし）」「文明論之概略（がいりゃく）」「かたわ娘（むすめ）」「福翁自伝（ふくおうじでん）」など数多くありますが、なかでももっとも有名なものは「学問のすゝめ」です。これは三百万さつ以上も発行されましたから、明治の初期のベストセラーであるばかりでなく、現在のようにジャーナリズムがさかんになった時代にいたるまでひろげて考えてみても、たいそう普及（ふきゅう）したベストセラーであることはまちがいありません。にせものがあらわれるほど普及しました。



「学問のすゝめ」表紙



「学問のすゝめ」のにせ版
「学問のさとし」表紙